

高見順日記

十六卷

勁草書房

高見順日記 第六卷

1965年2月3日 第1刷発行

定価 700 円

著 者 高 見 順

発 行 者 井 村 寿 二

東京都千代田区神田駿河台2-3

印 刷 者 山 田 一 雄

東京都青梅市根ヶ布385

発 行 所 東京都千代田区
神田駿河台 2-3

勁 草 書 房
(株式会社大和出版部)

落丁本・乱丁本はお取りかえします。
© 1965 Jun Takami

精興社印刷・複製本
Printed in Japan

高見順日記 第六卷 目次

廃墟の日常

昭和二十年十月	3
昭和二十年十一月	87
昭和二十年十二月	229
昭和二十一年一月	269
昭和二十一年二月	327
昭和二十一年三月	391

廃墟の日常

——昭和二十年十月二十日～昭和二十一年三月三十一日——

十月二十日

事務所行。

スカートの女が少しずつ街に現われた。「キモノ」姿はまだ見かけない。事務所へ行くと、一高時代の友人橋爪君（註＝橋爪克己）が書きおいて行った手紙を渡された。先頃来連絡ニ努メテキタガ今日ニナツテシマイ御都合如何カト思イマスガ、今晚内野ノ出獄歓迎会ヲ高円寺ノ内野宅デヤルノデ御来駕願イタイノデス、出席者ハ無名会ノ連中デ、アダチ、滝沢等十名バカリ、御都合ヨカッタラ本日後五時高円寺駅北口マデ来テ下サイ、ボクガ案内シマスカラ……云々とある。

石野径一郎君来訪。渋川驍、石光葆両君来訪。二人と事務所を出る。

中央線は新宿駅から先へ行くのは今年初めてだ。焼けている。焼野原の連続だ。家のあった頃は隠されていた土地の起伏が、電車の窓から、はっきりと見渡され、ここらがまだ住宅地化されなかった頃の姿に再び戻っている。ここに人家がのびて来たのは、震災後のことだったか。その急速な市街

化も、一夜にして再びもとの姿に還元せしめられたわけだ。ここがまた市街地となるのはいつのことか。

高円寺で降りると、駅前は焼跡であった。焼跡の新聞売りの前にえんえんたる行列がならんでいる。新聞は買ったかったが行列のながいのにうんざりして、やめた。そして駅の売店で「新日本」と「新生」を売っているのを見て、これを買った。ここには行列はない。「新日本」は十六頁で五十銭、「新生」は三十二頁で一円二十銭、型は同じ。「新日本」は木原氏主宰、小説「其日の福沢先生」（子母沢寛）、エッセイ「対立と調和」（安倍能成）のほかは無署名論文。「新生」は室伏高信主宰、執筆者は室伏、岩淵辰雄、福本和夫、尾崎行雄、賀川豊彦、水谷長三郎、三宅晴輝、馬場恒吾、小林一三、青野季吉、正宗白鳥。なかなか魅力がある。終戦後、最初に現われた新雑誌だ。

駅前で、白鳥の評論を読んでいると、「よォ」と橋爪が声をかけた。つづいて古末君が現われた。「呉軍港赤化事件の巨魁」とかつて新聞に書かれた古末君だ。

古末君を駅に残して、私と橋爪とは内野の家へ行った。私は歩きながらこんなことを思った。これが終戦前だったら、内野の出獄歓迎会に、こう躊躇なしの明るい気持ちでとも出られはしなかったろう。内野に会いたいことは会いたい、出獄歓迎会というような「集合」にうっかり顔を出して、どんな飛ばっちりをうけるかもしれないと尻込みをしたろう。それほど「卑怯」な私でもあるのだが、それほど用心深く身を処さないとどんな目に会うかわからない時代でもあったのだ。個人的な友情とというようなことは認められなかった。それに早速いいがかりをつけられた。シンパ事件のほとんどはそれだった。第一、出獄歓迎会というようなものを、特高の監視なしにはとうていやれなかった。も

し届けをしないでやったとしたら、無届集会でたちまち検挙される。そして再建協議というような罪名をつくられてたちまち送局。

(変ったものだ。)

まだその変り方に慣れないので、不思議な感じさえるのだった。

内野の奥さんは医院をやっていた。その診察室に内野がいた。滝沢君が先に来ていた。

「やア」

「やア」

「よかったね。——案外元気だね」

と私はいった。内野は例の政治犯釈放で仙台刑務所から出されたのである。随分ながいはずなのに、あまり寒^{やう}れてはいないで、その頬は陽^{やう}焼けさえている。

「外へ出て荷役をやっていたから……」

と内野はいった。

「何年になるのかね」

「四年と半ヶ月」

もうすぐ刑期満了だったという。

「いつやられたのだったかね」

「十六年の二月」

「そうか」私がジャワへ行っていた留守中だ。前の年の暮に会った時は、

「いま、沢庵の値段をきめているよ」

といって彼は苦笑した。東京都の物価、なんかというところに勤めていた。

「どうして、つかまったのか」

「それがねえ」

言葉すくなくにいった。松本高等学校に学生の研究会があつて東大の学生が指導していた。その学生が内野のところに来ていた。その学生グループが検挙されて、内野の名を出した。

「一方、その頃、刷同の再建運動があつたりしたもので……」

——内野は一高時代、私より一年下だった。一高生の頃の内野は詩人だった。橋爪も一年下で、小説を書いていた。

私がたしか三年の頃、全国の高校の社会思想研究会が解散を命ぜられた。私もその研究会の会員の一人だった。

研究会は非合法団体になった。するとかえつて学生の研究熱が煽られた。私の級では、研究会の会員は少数の「異端」だったのだが、一年下の内野や橋爪の級になると、会員でないものがかえつて「異端」、——いささか誇張になるが、しかし大体そんな形勢になった。頭のいい学生はみな左翼化した。内野も橋爪も、詩や、小説を捨てた。芸術、いかなる芸術も、ブルジョア的なものとされ、阿片視された。プロレタリア芸術の理論というものはまだ出てきていなかった。（出てきてからでも、「実行運動」が第一とされ、芸術運動は軽蔑された。実行運動に飛びこめない卑怯な連中のやることだとされていた。）

「無名会」は私より一年下の、そうした左翼派が、大学を出てから、友情機関として作ったものだ。大概は投獄された経験を持ったもので、時代が時代故、もう「運動」もできず、生活のため、あまり

上等でないところに勤めを持っている連中だった。私は、彼等より一年上なのだが、内野や橋爪などの関係で、その仲間に加わっていた。安達も私と同じ級なのだが、一年落第して彼等と同級になった。彼等より一年上で「無名会」に加わっているのは私ひとりだった。私は私と同級の人々の作っている会には入らないで、——というより、入れて貰えないで、この「無名会」に入っている。私と同級の人々の作っている会には、内務省とか外務省とかの役人が入っていて、私とは肌が合わず、彼等の方でも私と肌が合わないとしている。たった一年の違いでの、この「時代」の恐ろしい相違を私は面白く思う。私と同級の人々からは、今度マッカーサー司令部からの指令で解職になった警察部長などが数人出ているところから推しても、一高時代の秀才の大半は官途についたことがわかる。ところが一年下になると、秀才の大半は赤化したのである。そうして一年上の人々によって捕えられ、裁かれ、投獄されたのである。私はそれを面白く思う。

安達がビールを持ってきた。須藤君が来た。

「連絡が悪く」（と橋爪がいった。）集ったのはそれだけだった。二階に移った。

内野が刑務所の食事の話をした。

朝、昼は飯に汁。

夜のおかずのうち、もっとも「上等」なのは、

赤鳩——うずら豆。量はすくない。十三粒位しかない時がある。

おかずの隠語。

白鳩——隠元豆。

闇鉄砲——ひじきに豆。

控訴院——にしん。

教誨師——天ぶら（衣ころもをつけているから）。一年に一、二度しかない。

楽隊——馬鈴薯と豚の煮込み（ジャガブタで楽隊）。これも一年に一、二度。

ドブ板——昆布。

軍馬——大豆。

内野は營養失調で病棟に入った。病棟は満員で、身体のは、だけの狭い蒲団二枚に三人寝させられた。横になっては寝られない窮屈さだ。あっちでもこっちでも、うんうん唸っている。蚤、しらみの跳梁。皮膚病の蔓延。まるで地獄だ。

「幸い俺は軍の実験材料になってたすかった。軍隊に營養失調が続出したんだね。それでその治療薬の実験だ。その実験材料になったので生命がたすかった。」内野はいった。

滝沢たちが持ってきた鯖さばが食卓に出てきた。焼いたのに刺身。もともと古いのか、一日置いたためなのか、焼いたののなかの骨のところの肉が赤かった。舌を刺す。気持が悪かったが、みんな食っているのに、私も食った。せっかく苦心して入手したという鯖なので、食わないのは悪いような気がした。みんなそうして遠慮し合い牽制し合っていたのかもしれないが、気味悪く思いながら、みんなが食うのだからと私も食った。

橋爪たちは民主主義普及の会を作るという。その財源として千葉に食料品加工会社を作るという。みんな元氣だった。生色を取り戻した感じだった。

こうした優秀な頭脳がこの十何年間、全然闇に埋れていたのである。無駄に放置されていたのである。そしてそういうことは、この人たちだけのことではない。私は苦しい想いに嚙まれた。

日本の文学もまた、闇に追いこまれていたのである。

電車の時間があるので、私はひとり先きに帰った。道を間違え、焼跡の壕舎に明りのついているのがあったので、「——今晚は」と声をかけた。駅へ出る道を尋ねた。すると、出入口のすぐ下から、むくむくと人が起き上って、丁寧に教えてくれた。うすい蒲団一枚、そしてどういうのか、その中年の人は、裸かだった。地面のすぐ上の板の上に寝ているのだ。これで身体を悪くしないのだろうか。駅は薄暗かった。電球がないのだろう。

向側の歩廊に人だかりがしている。笑い声が挙っている。アメリカ兵が酔ってでもいるのか、大声で何かいい、何かおかしい身振りをしている。そのまわりに日本人が群っている。そのなかに、若い女の駅員が二人混っている。アメリカ兵は自分の横を指差して、女の駅員に、ここへ来いといっている。そして何か身振りをして見せる。周囲の日本人はゲラゲラ笑い、二人の女の駅員は、あら、いやだといった按配に、二人で抱きついて、嬌態を示す。彼女等は、そうしてからかわれるのがうれしくて堪らない風であった。

別の女の駅員が近づいて来た。からかわれたいという気持を全身に出した、その様子であった。

なんともいえない恥しい風景だった。この浅ましい女どもが選挙権を持つのかとおもうと慄然とした。面白がって見ている男どもも、——南洋の無智な土着民以下の低さだ。

日本は全く、底を割って見れば、その文化的低さは南洋の植民地と同じだったのだ。自惚れていたのだ。私自身自惚れていたのだ。

電車のなかで、読売の小山君に会った。出版部に移ったという。文化部長の原氏に紹介された。河上君もいた。ビルマから一緒に帰った○○君もいた。

高田寺の某所で出版部と文化部の打合わせ会があったのだという。しもた家の奥まった一室で、御馳走が出たという。こういう料理屋ならぬ料理屋が東京にはいろいろあるのだらう。

横須賀線の終電に乗って、暗い電燈の下で、「新生」を読んでいると、眼が痒くなった。暗いところで小さい活字を読んだせいかと、眼をこすっていると、今度は耳のなかが痒い。つづいて耳が痒い。「しまった！」

顎が痒くなった。掌が痒くなった。指の股が痒くなった。

前の客が変な眼で見ている。しかし痒くて痒くて我慢ができない。気がつく、筋向いに朝日の文化部の水口君がいる。何か書いている。

「早く北鎌倉につかないかなア」

痒さは刻々にひどくなる。刻々にひろがって行く。北鎌倉についた。水口君のところへ行って、挨拶をして、

「魚にあたって、痒くてしょうがないんです。弱ったです」

変な眼で見えていた客に聞えるようにいった。

家に帰ると、裸かになった。全身に赤い斑点が生じている。島崎君が来ていて、健胃錠がいいというので、大粒を二つ飲んだ。搔くと、みるみるふくれ上って行く。顔はもうお化のようにふくらんだ。湯に入って思い切って発散させた方がいいかもしれないと風呂場に飛び込んだ。湯に入っていると、痒くない。そのかわり、酔ったようになって、頭にドキンドキンと動悸が打つ。

クレオソートを飲んだ。妻が、あぶないと思いつながら食べるナンテ、もしものがあつたらどうするんですと私の不注意を怒りながら、ふくれ上った妙な顔を見て、噴き出すのだった。

「笑いごとじゃない」

身体を掻きむしりながら怒鳴った。「痒くて痒くて、死にそうだ。狂い死にしそうだ」

「だから、気をつけて頂かなくちゃ……」

「気をつけてはいたんだ。危いぞと思つたんだが、せつかくの御馳走を食べなくちゃ、悪いと思つて……」

「そんな……」

「食べなくちゃ、悪いもの」

いいながら、私は自分の弱気を呪つた。しかし、皆も食べていた。皆も弱気から食べていたのか。しかし、この蕁麻疹はたちで、私のようにこう苦しまない人もいるのだ。

ピオカルクをまた飲んだ。蕁麻疹の薬だ。初めからこれを飲めばいいのに、精神が錯乱している。ふくれ上った顔は鬼のように真赤だった。

十月二十一日

朝、眼をさまして便所に行った。下痢。

痒さはまだとまらない。前夜より、痒い場所がふえている。

胸が悪い。ふらふらだ。

妻に飯島さんに来て貰いに行った。ヒマシ油を飲む。

池川、二口両君来る。島崎君は前夜泊った。寺沢君を囲んで話をしている。私も加わりたかったが、そんなところではない。

午後、飯島医師来る。カルシウム注射。全身に火のような熱を覚え、驚いた。

夕刻、痒みとまる。

一日昏々と寝ていたので、夜半眼がさめ、まだ頭ははっきりしていなかったが、二口君に頼んで持ってきて貰った花袋の「百夜」を読む。母の部屋では、母へのサービスで、みんな泊りこみで花合わせ。

昨日留守中に西脇未亡人来訪とのこと。故人の著書「コドモの英語」再版について依頼さる。

被選挙権の年齢

男女満廿五歳に

政府は去る十三日の閣議において婦人参政権を認めると同時に選挙権は男女とも満廿歳とすることに決定したが、廿日の臨時閣議に残された被選挙権の年齢、大選挙区制の採用、選挙取締法の改正等の重要改正要目を付議、堀切内相から説明した後別項の如き方針を決定した、この方針に基いて具体的に選挙法改正要綱を整理、来る廿三日の閣議において正式に決定することとなった、この内務省の方針は新時代に対応する国民の民主主義的空氣を強く反映、男女被選挙権の年齢は満廿五歳となった、選挙区は大選挙区制を採用、選挙区は定員十五人を標準とし、十五人以上は二つに分割するが、八月末の人口調査によると定員十五人以上の選挙区は北海道、東京、兵庫、福岡、愛知、大阪、静岡、新潟の八都道府県で他は一府県一選挙区となる、ただし現聯合軍占領下にある沖縄県の選挙は勅令をもって定むる期日まで行わないことが明かにされた、改

正方針は次の通りである

閣議決定の要目

一、被選挙権の年齢を男女共廿五歳とする

二、選挙区及び議員定数に関する事項（一）大選挙区制を採用、十五人程度を標準とすること（二）議員総数は現在通りとして各選挙区の議員数は昭和廿年十一月一日現在調査の人口を基準として定むること（三）大選挙区制の採用に伴い左の措置を講ずる

（イ）各種立会人の数を実情に応じて制限する

（ロ）補欠選挙の執行を議員定数の四分の一に制限して、欠員の出来るまで執行せず、但し四分の一に達しても定員が少数で一名のときは二名に達した場合補欠選挙を行う

三、選挙運動に関する制限を緩和する事項

四、選挙公営に関する事項 選挙公報の形式及び配布方法を左の如く簡素化すること

（イ）公報は議員候補者毎別紙とせず一括印刷すること

（ロ）公報の配布は一世帯単位として隣保組織の利用を考慮する

五、復員現役軍人及び帰還在外邦人の臨時名簿に関する件 復員現役軍人及び帰還在外邦人につき臨時に選挙名簿調製の途を拓くこと

六、沖縄県に関する事項 同県においては勅令を以て定むる期日まで選挙を行わざるものとする

七、内地在住の朝鮮人及び台湾人に関する事項 内地在住の朝鮮人、台湾人も選挙権及び被選挙権を有するものなること

八、議員候補者に対する事項

（イ）有権者名簿を与えることを取止むること

（ロ）前回の如き議員候補者に対する選挙運動用紙の特配はこれを取止めること

（読売報知）